

修士論文（要旨）  
2019年1月

協働学習によるカタカナ語の学び  
- プロジェクト型の学習を通じた気づきの分析 -

指導 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
217J3007  
山本 南奈

Master's Thesis(Abstract)

January 2019

Learning Katakana through Collaborative Learning:  
An Analysis of “Awareness” through Project-type Learning

Nana Yamamoto

217J3007

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

## 目次

第1章 研究の背景 .....	1
第2章 先行研究.....	3
2.1.1 カタカナ語.....	3
2.1.2 カタカナ語教育の先行研究.....	4
2.1.3 日本語教師に対するカタカナ語使用の調査.....	5
2.2 気づき .....	6
2.3 意識の変化.....	9
第3章 調査概要.....	10
3.1 プロジェクト型学習 .....	10
3.2 調査の目的.....	11
3.3 調査方法 .....	12
3.3.1 アクション・リサーチ.....	12
3.3.2 アクション・リサーチを使用する理由.....	12
第4章 カタカナ語のプロジェクト型学習の実践.....	14
4.1 対象者 .....	14
4.2 実践内容 .....	14
4.3 データ収集と分析方法.....	15
第5章 カタカナ語のプロジェクト型学習調査（第1回、実践A・実践B） .....	17
5.1 実践A.....	17
5.1.1 プロジェクト中の記録.....	19
5.1.2 振り返りテストとアンケート .....	24
5.1.3 実践Aの改善点 .....	27
5.2 実践B.....	28
5.2.1 スケジュールと実施前アンケートとテスト.....	28
5.2.2 プロジェクト中の記録.....	30

5.2.3	振り返りテストとアンケート	35
5.2.4	実践 B の改善点	38
第 6 章	カタカナ語のプロジェクト型学習実践（第 2 回）	39
6.1	実践 A、実践 B から見えてきた問題点	39
6.2	実施内容	39
6.3	スケジュール	40
6.4	プロジェクト中の記録	41
6.4.1	混合グループの記録	41
6.4.2	非漢字圏グループの記録	44
第 7 章	調査結果の分析	46
7.1	アンケート結果	46
7.2	プロジェクト振り返りテスト結果	52
7.3	プロジェクト中の会話の内容と気づき	52
7.3.1	混合グループ	53
7.3.2	漢字圏グループ	56
第 8 章	考察	61
8.1	気づき	61
8.2	カタカナ語の協働的な学習の有用性	67
第 9 章	まとめと今後の課題	69
9.1	カタカナ語の協働的な学習の結果	69
9.2	教育現場への応用と意義	69
9.3	カタカナ語の協働的な学習の限界	70
9.2	今後の課題	70

参考文献

**巻末資料**

外国人労働者への関心が高まる中で、日本語教育推進基本法案が進められ、日本語の教育にも注目が集まりつつある。しかし、生活に必要なカタカナ語の教育についての注目度は低い。陣内（2009）や中山他（2008）の調査結果を見てもカタカナ語の教育の発展が必要だと言える。また、日本の教育では学習者主体の授業が叫ばれており、日本語教育も例外ではない。稿者は経験から、語彙をしっかりと理解するためには「気づき」が必要であると考えた。そこで、本研究では気づきを促すために「協働学習」を用いたカタカナの教育を行い、カタカナ語の気づきにはどのようなものがあるかを観察するとともに、この教育の有用性を考察することを目的とした。

カタカナ語の教育に関する先行研究は稿者の見る限り少なく、山下他（2013）のようにカタカナ語の表記法を教えるものが多い。しかし、カタカナ語の表記は日本語化の法則が多く「ゆれ」もあり、さらに稿者の調査で日本語教師によっても違うことが明らかになっている。そのため、暗記するのも困難である。そこで、村岡（2012）の Language Awareness の気づきと小柳（2017）の第二言語習得の気づきを参考に、気づきを促すカタカナ語の教育を行うことにした。館岡（2000, 2005）や横山（2004）により、アウトプットや仲間との相互作用から多くの気づきを得られることが期待できるため、協働学習であるプロジェクト型学習を行うことにした。高山（2008）や村岡（2013）のプロジェクト型学習の結果からも気づきが観察されている。本研究では関（2010）の漢字プロジェクトを参考に実践を行い、以下3つの研究目的を明らかにすることにした。

1. カタカナ語ではどのような気づきがみられるか？
2. プロジェクト型学習による協働的なカタカナ学習によって、日本語学習者はカタカナ語の何について、どのように気付くか？
3. カタカナ語の協働学習は有用性があるのか？

研究はアクション・リサーチを用い、カタカナ語の協働学習を記録した。実践は3回行い、実践ABを第一回、実践Cを第二回と分けた。データ収集はテスト、アンケート、ポートフォリオから行い、第二回は録音を西（2017）を参考にLREの定義と分類を決定し分析を行った。本稿での定義は「協働学習の中で学習者が発表するカタカナ語の、似ている言葉について、同じ意味の日本語について、原語について、カタカナ語そのものについての疑問が語られたり、気づいたことを話あっている部分」とする。第一回の実践から母語で対話ができるグループと日本語を共通言語として対話をするグループでは気づきに違いがある様子だったため、分析の分類は漢字圏非漢字圏の混合グループの協働対話と漢字圏のグループの協働対話とした。

気づきは、似ている言葉、カタカナ語と同じ意味の日本語、原語とカタカナ語、母語との関係、カタカナの言葉そのものについて語られている5つの部分から観察でき、分析結果から分かったことは二つあった。一つはグループによって談話の視点が違うことである。漢字圏グループはその言葉の意味を深く理解しようとしている場面が多く、混合グループは1つの言葉から似ている言葉を連想したり表記に焦点が当てられたりと、あまり意味について深く話すことはなかった。もう一つはプロジェクトの成功にグループの違いは関係ないことである。実践Aは漢字圏のみのグループでプロジェクトは成功したが、実践Cの漢字圏グループは成功しなかった。実践Bと実践Cの混合グループも同様の結果となり、成功するかどうかはグループの編成に関係がないことの裏付けになった。研究目的1の

タカナ語ではどのような気付きが見られるかについては、混合グループの方が表記発音に関する気づきが多く、漢字圏グループの方が意味に関する気づきが多いことが分かった。また、気づきの総数でいうと混合グループの方が多かったが、漢字圏グループの方が種類が多いことも分かった。研究目的2のプロジェクト型学習による協働的なカタカナ学習によって、日本語学習者はカタカナ語の何について、どのように気付くかについては、グループによっても異なるが、カタカナ語の表記や意味について、事前の情報収集または他者の指摘によって気づくことが多いことが分かった。研究目的3のカタカナ語の協働学習は有用性があるのかについては、カタカナ語を協働学習で行うことは1人で暗記するよりも様々な問題に気づけ、面白さにつながると言う点で有効であると言えた。改善点も多いが、カタカナ語の協働学習は多くの気づきを得られ、興味も持つことができるため、今後も試していく価値がある。

## 参考文献

池田玲子・舘岡洋子 (2007)

『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

小柳かおる (2005) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』株式会社スリーエーネットワークス

小柳かおる・峰布由紀 (2017) 『認知的アプローチから見た第二言語習得—日本語の文法習得と教室指導の効果—』くろしお出版

齋藤伸子・関麻由美・林さと子 (2007) 「漢字クラスにおける自律学習と協働的活動」『留学生の見た漢字の世界』春風社

陣内正敬 (2009) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化 = 語言与文化』 11, 47-60

陣内正敬・田中牧朗・相澤正雄 (2012) 『外来語研究の新展開』おうふう

関麻由美 (2010) 「生活の中から学んだ漢字を共有する「今週の漢字」実践報告」『留学生の見た漢字の世界』春風社

高山宗寛 (2008) 『言語的な気づきから学びを深める英語学習』兵庫教育大学教育実践資料

武田明子 (2002) 「カタカナ語の留学生指導に関する一考察」『マテシス・ユニヴェルサリス』 4 (1) 191~206

玉木佳代子 (2009) 「外国語学習におけるプロジェクト授業 : その理論と実践」『立命館言語文化研究』 21(2), 231-246

中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子 (2008) 「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』 138号 83-91

中山恵利子 (2011) 「日本語教材は「イメージ」を教えられるのか—カタカナ語教育を考える その1—」『阪南論集 人文・自然科学編』 46(2), 29-41

中山恵利子 (2012) 「日本語教師は「イメージ」を教えられるのか : カタカナ語教育を考えるその2」『阪南論集 人文・自然科学編』 47(2), 95-111

中山恵理子 (2012) 「日本語学習者の外来語意識—日本語教育における外来語教育を考える—」『外来語研究の新展開』 207 - 223

西菜穂子 (2017) 「学習過程の言語化が第二言語習得に与える効果—ランゲージング研究の現状と動向—」『第二言語としての日本語の習得研究』 20号 116-136

村岡有香 (2012) 「気づきを高める英語教育」『教育研究』 54, 233-244

村岡有香 (2013) 「日本の小学校におけるストーリーを生かしたプロジェクト型学習活動 : 教育効果の検証」『恵泉女学院大学紀要』 25, 71-92

山下直子・畑ゆかり・轟木靖子 (2013) 「韓国語母語話者に対するカタカナ語の指導の試み : 聞き取りテストと意識調査より」『言語文化と日本語教育』 45, 20-29

横溝紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』日本教育学会編

横山紀子 (2004) 「言語習得における インプットとアウトプットの果たす役割 —単語の習得調査の分析から—」『日本語国際センター紀要』 14号

Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11, 129-15